

社会学

思想・文化情況の〈現在形〉を射抜く
批判的視座を求めて

La Vue

No.11 (2002/09/01号)

発行人:山本繁樹
発行所:るな工房/黒猫房/窓月書房
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
TEL/FAX 06-6320-6426
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail:Y1J00302@nifty.ne.jp

目次

- ◆グローバリゼーションと身体テクノロジー 美馬達哉
- ◆ポストWTCの建築 米正太郎
- ◆肉声の明滅 上山和樹
- ◆技術革新と個人出版 8月サンタ
- ◆翻訳学の可能性 岩坂 彰
- ◆編集後記

No.12は2002/12/01発行予定です。

■無断転載を禁じます■

グローバリゼーションと 身体テクノロジー

美馬達哉

「グローバリゼーション(グローバル化)」という言葉は、冷戦構造の崩壊以降の現代社会のあり方を分析する切り口として頻りに使われますが、その言葉で何を指すのかという点は論者によってさまざまです。ここでは、まずグローバリゼーションをめぐる代表的な議論を紹介し、それらに通底する問題系として(広い意味での)「身体」を考えます。そして、その問題意識を「身体」テクノロジーとして少し掘り下げてみましょう。

いま グローバリゼーションに関して一番議論されているのは、その経済的側面です。市場原理を徹底させることは技術革新を加速し、豊かな社会を生み出すと、現在の経済的グローバリゼーションの推進者は主張しています。この数十年での国際的為替取引の自由化の結果、そこにつき込まれる資金は一日一兆ドルを超え、国際的資本取引の規模も拡大しました。日本でも、とくに九〇年代以降、規制緩和と民営化に向けた流れが押し進められつつあります。しかし、経済的グローバリゼーションは、インターネットなどの情報産業における技術革新を通じて

私たち(情報強者だけともいえそうですが)の生活を豊かにしてくれた反面、世界規模での貧富の差を拡大したことも明らかです(こうした負の側面については、9・11テロ事件の後にメディアの中で流通することが急に多くなりました)。しかし、この点ははっきりさせておかなければなりません。事件を起こしたとされているのは、グローバリゼーションを真摯に批判してきた人々ではなく、アフガニスタンでのソ連軍侵攻に対抗するゲリラとしてアメリカによって育てられた人々でした。一方、このようなグローバリゼーションの現状を批判して、トランスナショナル企業や世界貿易機関(WTO)主導ではないグローバリゼーションの可能性を求める運動が草の根レベルでわき起こっています。

また、経済とは区別される独自の領域として文化の面でのグローバリゼーションを重視する考え方もあります。たとえば、アメリカ型の画一的な消費文化が世界的に拡大(マクドナルド化、ダイズニー化)するのと同時に、ローカルにはそれに対する種の対抗として、

特定の宗教的あるいはエスニックなアイデンティティを絶対視する潮流が力を持ち始めるという現象があります。ムスリム社会を中心とした「イスラム原理主義」やヨーロッパでの極右勢力の台頭はこの一例です。しかし、グローバルにヒトやモノがかつてない規模で移動し、グローバルメディアによって情報が瞬時に共有されるなかでは、文化は折衷主義的で異種混交な多元的文化とならざるを得ません。そうした状況の下では、文化を実体的な不変のものとしてとらえる本質主義的の見方は原理主義や排外主義につながりかねないとして批判されています。商業主義的な画一化と排外主義的な原理主義とは、グローバリゼーションのマイナス面を表す表裏一体の双子のようなものなのです。これに対して、カルチュラル・スタディーズのなかでは、画一主義的にならず自民族中心主義的にならないエスニシティ(民族性)の可能性が議論されています。

さて、この二つの視点はどう関係しているのでしょうか。その答えはしばしば、経済的グローバリゼーションが文化を支配の道具として利用しているのか、それとも経済現象に還元できない独自の文化的領域でのグローバリゼーションを研究対象とすることができるのか、という不毛な二項対立として語られていました。しかし、私たちは、グローバリゼーションのなかでの「身体」という問題設定を考えることで、この経済か文化かという二分法に陥る危険から免れることができるのではないかと考えています(ただし、ここでいう「身体」というのは、人間の個人的身体と同時に、多数の人々全体をも集合的

身体と考えるという広い意味です)。

たとえば、経済的グローバリゼーションのなかで、ほとんど瞬間的に行われる資本や生産拠点の移動は、投資家にとっては配当を増加させる手段にすぎないことですが、労働力としてそこに組み込まれてきた身体にとってはリストラされるかどうかという死活に関わる問題です。また、文化が単に抽象的な価値観やルールに還元されるものではなく、身体の次元での慣習的行為に基礎を

持っていることは人類学者や社会学者によって指摘されてきました。ですから、経済と文化の両方の物質的基礎となっている身体というポイ

ナカニシヤ出版

グローバル・コミュニケーション論
対立から対話へ
津田幸男・関根久雄編著「グローバル化」とその反作用としての「ローカル化」を両軸に、現代社会を浮き彫りにする。28000円十税

攻撃性の行動科学(全2巻)
島井哲志・山崎勝之編 攻撃性を人の安定した特性としてとらえ、実証研究によって得られた最先端の知見を、二分冊で提供する。健康編 30000円十税 発達・教育編 28000円十税

ポタン博物館

監修 大隈浩 6000円 7520

古代から現代まで、約千点の服飾ポタンをオルカカラで収蔵し、素材などの簡潔な解説を付す。巻末索引、服飾史の資料。

天神さんの商店街 街いかし 人いかし
大阪の天神橋筋商店街で陶器店を営む者者の、「街いかし人いかし」の日々と、さらなる意欲を語る。 17000円 310

脱・ゴーマニズム宣言 小林よしのりの新装
上杉隆著 最高裁決定で「漫画引用は違法」と確定。指摘部分を原典通り改訂し、新装版として刊行。 12000円 310

物語・オーラリティ・共同体

新編物語序説

兵藤裕巳著 二八〇〇円 共同体をひき出した「能動性」による声が日本人「ニッポン」の深層を育んできたのはなにか? 「常民に語り継がれる伝説の口承文芸」に挑む。 二二〇〇円 ヒテゲームや映像メディアに囲まれた現代社会において、物語を語るということとはどのような試みなのか。「読む」という経験に他のメディアとの比較をとおして歴史的に迫る。

ジャワの宗教と社会

スハルト政権下のインドネシア

福島真人著 六四〇〇円 八〇年代のインドネシア、ジャワで繰り広げられた、国家と宗教の衝突の歴史、民衆とマイナー宗教のローカル・ポリティクスを洗剤質実の文化人類学者が紡ぎだす。

かなり不揃いの起業家たち

熱い思いから寒いなさまで、ホンネ満載の自作メッセージ集
起業サークル来夢主宰 中尾吉宏編 本書は36人の起業家が綴った生き残りの記録であり、それぞれの起業家の歴史でもある。これから起業を考えている人たちに「あたたいエール」を贈る。朝日新聞で紹介される。 15250円十税

こころのリミットをはずせば!

Your Best Year Yet!
ジニー・S・デイツラー著 「自分にはできるわけがない」「そんなことは無理だ!」...そんな消極的な考え(限界)を取り払い、「できる!」という自覚を呼び覚ます。 19050円十税

アリーフ一葉舎

〒606-8203 京都市左京区田中関町26
TEL:075-705-0088 FAX:075-705-0080
http://www8.ocn.ne.jp/~aleaftop/

ひつじ書房

〒112-0002 東京都文京区小石川15-25-8
tel:03-5684-6871 fax:03-5684-6872
http://www.hituzi.co.jp (価格は税別です)

仏教書と大阪の本の専門店
四天王寺書林
*小社直営。TEL06-6779-9531

東方出版

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-8-15
TEL06-6779-9571 FAX06-6779-9573

漱石のリアル

測量としての文学

若林幹夫 鉄道、都市、貨幣、帝国、恋愛...漱石を測量装置として近代社会のリアリティを新しい「読み」へ。 ◆2500円

母の手を逃れて

J.ペラン/朝比奈弘治、他訳
母親からの虐待に傷つけられていた少女を救ったのは、恢復と自立への日々を綴る自叙伝。虐待の連鎖は断つ。 ◆1600円

なぜ牛は狂ったのか

M.シュワルツ/山内一也監修
いま狂牛病はここまでわかった。狂牛病の嘘と真実を見究めるのに不可欠と評された本。 ◆2000円

紀伊國屋書店

出版部:東京都渋谷区東3-13-11
営業部:03(5469)5918 表示価格は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

ントに注目することで、グローバリゼーションの重層性を理解する道が開けてくるのではないのでしょうか？

さて、最初に、ただ身体というのではなく、身体のテクノロジという耳慣れない言葉を使いました。でも、これは別にクローン人間や臓器移植のような先端的な医療テクノロジを念頭に置いているわけではありません。むしろ、そうした先端医療の前提となつてそれを支えているような身体の社会的管理を可能としている制度を意味しています。つまり、身体というモノがもともと存在してそこにテクノロジが介入するという考え方はなく、テクノロジによって社会的に構築された身体が関係性としてのみ存在すると考えているわけです。たとえば、臓器移植という医療実践は、単に先端的医療テクノロジだけによって可能となるわけではありません。まず、人間の身体は臓器の集合であつて、その部品を取り替えても構わない(人間機械論)という医学思想での変化が必要でした。たとえば、「気」を重視する中国医学では臓器の取り替えという発想は決して生まれません。では、こうした近代西洋医学思想が普及して、先端医療テクノロジとして外科的手術法や免疫抑制剤が開発されれば、それで十分なのでしょうか。そう

ではありません。重度脳障害(「脳死」)患者がいても、臓器資源として使用する社会的仕組み(全国的な救急医療制度)がないければ臓器移植は実際には不可能であり、「フランケンシュタインの怪物」のように墓場あさがりが必要ということになりかねません。また、医学思想での変化だけでなく、重度脳障害である「脳死」を人間の死として宣伝するバイオエシックス学者や知識人も、実際に臓器提供者となり得る人たちに臓器移植を支持させるためには必要です。つまり、ここで身体のテクノロジと呼んでいるのは、個人的身体や社会的身体をいかに扱うかという広い意味での社会的制度のあり方のことなのです。

この意味

この意味での身体のテクノロジの中核にあるのは医療・福祉サービスであり、それを支えている枠組みは、先進諸国では「福祉国家」というシステムと考えられます。最近、こうした福祉国家システムの起源が二〇世紀の二つの世界戦争の際の総力戦・総動員体制にあつたのではないかと指摘が注目されています。これは「総力戦体制論」と呼ばれる議論ですが、日本の福祉国家と総力戦体制との関連については以前に論じたのでここでは省略します(拙著「軍国主義時代——福祉

国家の起源」、佐藤純一、黒田浩一郎編『医療神話の社会学』世界思想社、一九九八年)。ただ、グローバリゼーションのなかでは、総力戦体制であれ、福祉国家であれ、従来の一国家レベルでの枠組みが有効ではなくなりつつあると考えられるでしょう。

さて

、身体はテクノロジに生じたつある変化を象徴するようなできごとが最近ありました。それは、日本での集団健康診断でのデータが当初の目的以外の医学研究用に流用されてきたのが問題化したことです。その際に議論されたのは、血液などから得られる遺伝情報によって、何らかの疾患を今後発病する可能性があるかと判断された場合、どう医療機関側が対応するのかという倫理的問題でした。本人の事前の説明を理

解した上での同意(インフォームド・コンセント)なしに個人の身体の一部(血液など)や個人情報(血液検査の結果)が流用されるのは、それが善悪であれ悪用であれ、プライバシー権の侵害となることは明らかです。しかし、こうした情報は顔を持った個人の個人情報としてではなく、無記名の大量の個人性を失ったデータの集積として分析されて初めて、(研究者にとって)有用なものとなることもまた事実です。つまり、一滴の血液は、物質としてはある生きた個人のかげがえない身体の一部ですが、情報としては、(ある特定の病気と関係したり、特定の機能を持ったりする)ヒト遺伝子の情報を担うサンプルの一例に過ぎないのです。この問題にあらわれているのは、身体を物質として扱うか情報として扱うかの二つのテクノロジの間の相克なのではないでしょうか。そこで、この二つの身体のテクノロジの違いを少し考えてみます。

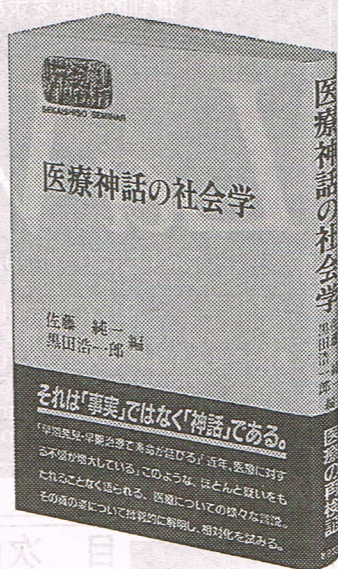
まず、従来の身体のテクノロジは、物質としての身体を管理することが目標でした。そのためには、個人を病院などの施設に收容すること(入院、入所など)が重視されてきました。これに対して、情報としての身体のテクノロ

物質

としての身体のテクノロジは、ローカルな国家(福祉国家)によって担われていました。しかし、情報としての身体に関しては、グローバルに集積してデータベース化することが可能となりつつあります(ヒトゲノム計画はそうした試みの一つです)。こうして得られた情報は、しばしば特許化され、その排他的独占権は知的財産権の国際的保護をうたうWTO協定の二つTRIPS(知的所有権の貿易関連の側面に

るな工房/黒猫房/窓月書房
自費出版等のご案内
◎ご希望の造本で製作致します◎
るな工房/黒猫房/窓月書房では、自費出版(詩集・歌集・特装本・限定本・記録集など)から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。
TEL/FAX:06-6320-6426
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

るな工房/黒猫房/窓月書房
自費出版等のご案内
◎ご希望の造本で製作致します◎
るな工房/黒猫房/窓月書房では、自費出版(詩集・歌集・特装本・限定本・記録集など)から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。
TEL/FAX:06-6320-6426
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html



医療神話の社会学
佐藤純一・黒田浩一郎編
本体2200円 四六判
ISBN4-7907-0691-5

「早期発見・早期治療で寿命が延びる」「近年、医療に対する不信が増大している」等々、ほとんど疑いをもたれることなく語られる、医療についてのさまざまな言説。その真の姿について批判的に解明し、相対化を試みた注目作。

世界思想社

〒606-0031 京都市左京区岩倉南桑原町56

TEL:075-721-6506 FAX:075-721-8707

http://www.sekaishisosh.co.jp/



るな工房/黒猫房/窓月書房
自費出版等のご案内
◎ご希望の造本で製作致します◎

るな工房/黒猫房/窓月書房では、自費出版(詩集・歌集・特装本・限定本・記録集など)から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。

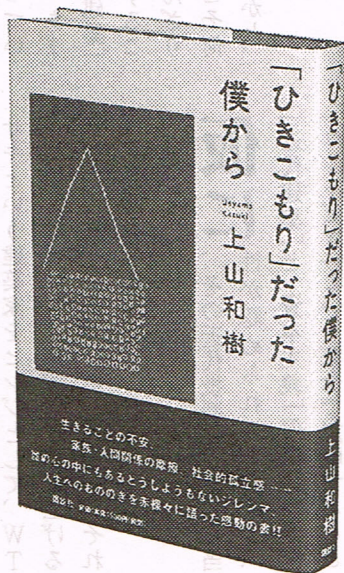
TEL/FAX:06-6320-6426
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

肉声の明滅

上山和樹

■出版まで

僕には子供のころから、悩まされている感覚があった。何かの現場にいて、あるいは人と話していて、「いや、それは違う、本当は、こうじゃないか……」という小さな火花みたいな感覚が、まさに火花のように閃き、そして周囲の圧倒的な力学の中で消えてしまうのだった。それは何か異常に貴重なものに思えたが、自分の言葉の政治力ではまかなってやることのできない、小さな小さな声の明滅だった。消えてしまった後、それは何だっただかもう思い出せない。取り返しのつかない喪失感が僕を責め続け、あまりにも貴重な記憶や意見がどこにも記録されないまま消えてゆくこと、それは「恐怖」に近い喪失感だった。——二〇〇〇年六月に大阪のある親の会で発言して以後、僕は自分がそれまで流産させ続けていた小さな声たちを、必死にまさに「声」にした。形を与えて、「公の場所」に出す努力をしたのだった、それは語っている最中、自分を忘れることができるぐらいに熱中できた、必死の取り組みだった。語っている間、僕はまさに「自分を忘れた」。そんな熱中は、生まれて初めてであり、このテーマ以外ではあり得なかった。



二〇〇一年五月、「本を書いてみませんか」というお申し出を頂いたのは、毎月のように続けられた「声を形にする」作業がある程度ルーティン化し、「同じことをいつも言わなければいけない」という感覚がなくなった頃だった。即座に受諾した。「インタビューをテープ起こしして、

他の人に書いてもらうこともできる」という選択肢を断わり、「自分で書く」——自分の言葉の機能に賭けてみる——ことを決めたものの、「書き始める」までが大変だった。「ひきこもり」は、「コミュニケーションが機能しない」ことを最大のテーマの一つとしている。どんな文体で書くか。——それは、「誰に向けて書くか」という問いと重なっている。自分のことを「私」と言うか、「僕」というか。「です・ます」で書くか、「である」で書くか。僕は「書く形」を決めるまでに、一ヶ月を要した。

出版社

からのお申し出は、一人称で、体験告白を書くことだった。僕としては、それはそれで貴重なアイデアだったが、僕がどうしても伝えたいことは、それだけで尽きているはずではなかった。「本当は、そうではないのに」——その声には、もう少し一般化すべき、「私」個人の経験に還元されるべきではない一般性を伴った内容が含まれているはずだった。七月初旬、僕は本を二部構成にすることを編集者に提案し、いよいよ本格的な執筆作業が始まった。

書く

作業は、僕から食事と睡眠への生理的機能を奪った。消耗し続け、十一月末に全ての作業を終えた頃には、僕は完全に寝込んでしまっていた。近くのコンビニにも行けない体力。「書き上げた今、僕はこれからどうするか」——まったく分からず、かといってそれまで続けていた訪問活動もやめるわけにはいかず、僕は自分をあらためて「ひきこもり支援」の活動に再投入した。心と体の機能は衰弱し続けた。

「書くまで」はあれほど停滞していた僕の指は、書き始めると、今度は止まらなくなつた。最高で、四百字詰め原稿用紙七十枚分を一日で書き上げた。「二七〇枚」という制限枚数を越え、気が付くと僕は八〇〇枚以上の原稿を書き上げていた。「ここでのだけは、嘘をつきたくない」——その覚悟は、いつの間にか僕の執筆作業を「遺書作成」の真剣さに変えていた。その作業は、実際に僕にとつて「遺書」の領域にあった。「これだけは、言っておきたい、さもなくば死ねない」——その感覚は、極端に私的個性の強いジャンルにあるはずの僕の文章を、極めて無私的な純粋さに精錬した。つまらないナルシズムで自分の文章が汚されることは、そのまま自分自身への冒瀆を意味した。僕は、「書き終えたら死んでもいい」と思える執筆姿勢を保ちつづけた。

■出版以後

何かがすべき仕事があるとは思えなかった。書き上げたあとのエアポケットのような時間を、僕は支え損ねた。酒の量も増え、僕は「一日中寝込む」日々を断続的に続け、それでも訪問活動への使命感だけを支えにしつつ、やっぱり「死にたい」と話が始まってしまっていた。二〇〇一年十二月中旬、本は出版された。

本の執筆と出版は、母には完全に内緒で行なわれた(父はすでに他界している)。執筆のきっかけになった雑誌取材さえ拒否した母が、僕の執筆を許可するはずはなかった。僕はもう確信犯の心情で、「これで死んでもいい」などと幼稚にも考えていたのだった。

すでに執筆を終えたはずの僕は、しかし衰弱の一途をたどった。訪問活動の頻度も減り、やはり「一日中寝込んで、布団の中でしくしくと泣き続ける」バカな日々が続いた。出版社経由で送られてくる読者からの感想文、それに「君には死んでほしくない」と言ってくれる友人たちの声だけが、その時の僕の支えだった。ここでも僕は、「声」に支えられた。

出版

から五ヶ月、二〇〇二年四月の二十日、僕は衰弱のきわみで譫妄状態に陥り、幻覚と幻聴の恐怖を味わった。日本兵の幽霊が僕を責め続ける。取り乱した僕を支えてくれたのは、またしても知人たちだった。メールでのSOSに即座に電話で応答してくれた精神科医、電話で冷静に僕をなだめてくれた先輩、深夜の救急診療に車で二時間以上かけてかけつけてくれた友人、——僕はやはり人に救われていた。人を避け続ける「ひきこもり」の僕が、「人」に救われている。

幻覚に怯え続ける僕を、母は「手を握って」いたわってくれた。これまで二十年近く、「冷戦」のような状態にあった母子関係が、ガラリと変わった。幻聴の多くは、母に関係していた。優しくいたわりのある母の声が、何度も僕の耳だけに

現れた。

五月、本の出版が母に知れる。親族の誰かが本屋で見つけて母に報告したらしい。——が、母に会っても、本のことは何も触れない。——そして五月の暮れ、母は朝から、ついに本のことで僕を責め始めた。「家の恥を世間に晒した」「和樹はまだまだこれからの人なのに、自分で自分の首をしめている」……。やっぱりそうか。一番分かってほしかった人にも、こんな言葉をかけられてしまった。今度は僕が激怒し、「俺が命懸けで書いた本なのに、そんなことしか言えないのか!」……惨めだが、そのまま報告しておこう。今はそういう状態だ。今日これから、実家に戻るが、おそらく本のこととは二度と母子間で語り合われることはないだろう。「なかったこと」として、完全に封印されるだろう。少なくとも、時間はかかる。「ひきこもり」とは、そういう話題なのだ。

今

の日々、僕はやはり「読者」と「知人」の声たちに支えられている。声。僕は「目線」に傷つけられ、「声」に癒されている気もする。この辺の事情は、まだこれから考えてゆきたい。——でも、ひとつだけははっきりしている。「ひきこもり」——それは、僕にとつて自分の自由意志とは関係ない形で僕にインストールされ

「ひきこもり」だった僕から

上山和樹 著

本体1500円 B6判 ISBN4-06-211072-5

生きることの不安、家族・人間関係の摩擦、社会的孤立感……誰の心の中にもあるだろう、人生への葛藤、赤い糸の感動の書!!

講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

TEL:03-3945-1111

http://www.kodansha.co.jp/

てしまったテーマなのだ。自分にミッシ
 ョンがあると、僕にはこのテーマ以
 外に考えられない。しかしひどくつらい。
 でもやめられない。――僕はこういう形
 で、自分の「必然的テーマ」と出会い、
 人々と声を交し合っている。――僕はひ
 よつとすると、世間の大多数の人々より
 も幸福で明確な形で自分のミッシヨンと
 出会ったのかもしれない、三十代も半ば
 にさしかかって。

声

僕はこれからも、自分の肉声を、
 他の人間の肉声と絡み合わせてゆ
 きたい、そこで何かを形にしていきたい。
 それに付き合ってくださいる方、どうか僕
 に声をかけてほしい。そこで何かを、い
 つしよに形にしていきたい。恐らく
 は、少数派の試みにとどまり続けるだろ
 うけれども。★

■プロフィール(うやま・かずき)一九六八年
 生まれ、兵庫県出身。中学で不登校、高校中退。
 大学に進学するも不登校・休学。父親の病死で
 なんと卒業するが就職せず、アルバイトに
 挫折するうち引きこもりに。二〇〇〇年三月、
 三十一歳で初めて自活。ひきこもり親の会での
 発言をきっかけに、それまでひたすら隠し続
 けていた自分の体験を生かした活動を考えてよ
 うになる。不登校のための家庭教師・訪問活
 動・地域通達の試みなどをしながら、ひきこも
 りの問題に取り組んできた。現在は休職・療養
 中で、これまでの無理のあった活動形態を見直
 し、「親世代」ではなく、「当事者たち」本人に
 呼びかけることのできる取り組みを模索してい
 る。著書・「ひきこもり」だった僕から(一)講談
 社)

ドメスティック バイオレンス

(夫やパートナーからの暴力)
から脱出しませんか。

私たちは、同じ立場であなたと向き合います。
 これからのために、下記のアドレスまでご相談ください。

E-mail:kabo8@abelia.ocn.ne.jp



DV被害者の会 コパン(なかも)

技術革新と個人出版

8月サンタ

■ノートパソコン一台、出版社開業の野望
 私はちょっとした野望を持っている。

それは、今手元にあるA4サイズの
 ノートパソコン、この一台で、「出版社」
 を開業することだ。単に、同人誌がやり
 たいとか、自費出版がやりたいとか、と
 いうことは、少しばかり違っている。

今、既存の、本来個人の手に負えなかつたマスコミのワークフローを、全部パソコンの上で、デジタルでなぞっている。
 原稿制作・編集・組版・画像加工・印刷・流通配布といった、高度な専門技術を要し、巨額の設備投資が必要だった出版の工程が、ひとつひとつ、小さなノートパソコンの上で可能になっていく。特にこの数年は、そんな劇的な上にも劇的な「進化」が、目の前で体感できる時代である。

もちろん

「出版」という産業のかなりの部分で既に、パソコンは活躍している。八〇年代中盤に登場したDTP、デスクトップ・パブリッシングは、出版の多くの現場で職人の手作業に代わって、工程の一部として定着した。

だが今起こっていることは、単なる「出版のデジタル化」ではない。数千万円、数百万円であったPCやプリンタが、数十万円、数万円で購入できるようになり、月額数十万円の費用が必要だったインターネットの専用回線が、数千円で引けるようになったという、レベルが違う革命のお話なのである。新規にスタートするのに、クルマ一台買うほどのカネもかからない。リスクを背負う悲壮感などない。

お偉方、御先達の講習を受けて、「認められるまで修行」する必要もない。認可を受けるための同業組合に加入しなくてもいい。高額な保証金を積まなくてもいい。しかし、商業出版レベルのクオリティは、出せしめるのである。

「個人でなにかやってみる」ことの障害など、何もないと言っている。
 この現実を前にして、単に情報の受け手であり続けることは、馬鹿げている。

■原点は「街の小さな本屋の小僧」
 自己紹介をさせていただきたい。一九六八年、京都生まれの三十四歳、今は東京で小さなデータベース構築の会社を経営している。最初からこの仕事、と決めていたわけではなく、二〇〇二年の今、自分の出来ることで、強気の値段の付けられる商売が、たまたまデータベースだったというだけのことだ。

学生

「物書き」や「絵描き」になりたいと思ったこともあったけれど、それ以前に、十代から二十代のほとんどを、学生時代のほとんどを、「本」に囲まれて過ごしてきた。

十五歳で市内の書店のアルバイトを始め、大学卒業まで、断続的に勤めた。バイト代はほぼ全て本代に消え、昼休みは図書館に、放課後は本屋の店員にと、どっぷり本に漬かった生活だった。

将来何になりたい、という、特別の希望があったわけではないけれど、書店では夢中になって働いた。給料は安く、本当はそれほど本が好きじゃない、書店の

正社員の大人たちに取って代わって、身を粉にして経験を積み、いくつもの本屋の開店スタッフになったり、大学卒業前には、町の流行らない書店に助っ人として呼ばれたりもした。今も京都には、私が高校三年のときに描いた看板を、十数年来そのまま使ってくれている書店がある。私の原点はそんな、街の小さな本屋の小僧である。

出版社

から送られてくる「本」をひたすら受け取り、店に並べ、お客への橋渡しをする、というのがずっと私の愛していた職場と仕事だった。本屋というのは定価販売だから、原価率の変動に頭を悩ますことのない、基本的にはとてもシンプルな商売で、それでいて扱う品目には限りがないから、とてもバリエーションのある、やり方によつてはとも夢のある商売だった。

毎日、毎朝、段ボール箱に詰められて届く、ぴかぴかの本たちが生み出さ



“PowerBook Publishing Cat”
通称P猫。

猫が抱えたこの夏、この役、このキャラクター、この猫は誰か……。
 リンゴ印のノートパソコンを抱えた猫が、一匹。本文寄稿者の、8月サンタの、手を伝うという触れ込みで、この猫が……。
 っそうと登場したキャラクタ……。
 っ立つ、の……。
 っ立つ、の……。

Illustration: 花田マイリー

東の源、出版のついで、造物主のまぶしいイメージを日々抱いていた。想像するに、それは別世界のことで、自分と出版元の間には、埋めがたい距離が感じられた。

だが、九三年に東京に転居、一転して版元側に勤めることになり、その見方はがらりと変わってしまった。学校では美術部に属し、絵や文を書くのも好きだった

た私は、東京で実際の商業出版の現場を、小規模の編集プロダクション、かなり大きな老舗の出版社、某有名漫画家のスタジオ、再び小さな出版社と、興味の向くまま勤め歩いた。その後には日本の書籍流通の要、取次の現場もかいま見ることとなった。そこでかなりのショックを受けた。

■出版界の歪みを体感、そしてパソコンと出会った

東京の大手と言われる出版社側では、全国の書店と、そこで金を払って本を買おう客のことなど、まるで視界に入っていなかった。今もそうだ。一番ショックを受けたのは「目線の違い」だった。まるで何かの「階級」が存在するかのようである。私は確かにクリエイターの所属する版元をまぶしく思っただけだけれど、本を書くことと、運ぶことと、売ることとは、ジャンルが違うだけで同じくらいクリエイティブで、誰が一番偉い、と考えたことはなかった。入荷するだけでは、本は勝手に売れはしないし、本を店に並べる、そのこと自体が各種のクリエイションである。在庫管理だつて店員管理だつて経費管理だつてそうだ。どれひとつとして欠けても、出版産業は成り立たない。(いや、正直に告白すると、書店の経費管理は、真つ当な会計の常識とはかけ離れたものだった。今ならよく分かる。うちだけが、ということではなく、このルーズさはこの業界全てに染みついている。)

だが

「良い本をつくっていれば、客は勝手に買ってくれる」といいたい、もう一方では「本なんか、売れりゃあ何でもいいんだよ!」という、どちらにしろ上から客を見下ろすビジネスの幻想がまかり通っていた。その当時でも、返品率の異常な高さや、再販制の弊害などは深刻な話題になっていたし、決して出版産業は好況だったわけではない。しかし「本の内容」デザイン論や文章論には日々こだわりを

論じて、無駄の多い書籍の流通業態や、店頭で汗を流して客に本を売る「商売」の部分は口にしなさい。そんなことは我々の考えることではない、と、高学歴の立派な編集者たちは皆言いたげであった。

派手

「発当てることは考えるけれど、実際のカネの回収、客からカネを取ることが、どれだけ大変なことかは知ろうとしない。立派なビルと、冷房の効いたタクシーの中から一歩も出ようとしない、想像以上に、狭い世界がそこにあった。ここで言っているのは立派なスーツを着てネクタイを締めた、一流の出版社社員たちのことだ。

本屋の店頭で、人は例えば「講談社だから」その本を買うのではない。自分の「欲しい内容」の本を買うのだ。これは本屋の常識である。だから、そこには無数の出会いの可能性がある。しかし現実には本の生まれるところまで遡ってみて、その中間には古い版元、巨大な版元が新しい版元、小さな版元を押さえ、書店の棚も押さえてしまう、という権力の関係が、露骨に存在することが見えた。その「力」は、出版物の品質とは何の関係もない。単なる「数」、資本金や規模の大きさであり、もう一つは「既得権」である。

机上の企画が次々に現実となり、本となって世の中に溢れ出る、そのダイナミズムは東京ならではのものが、それを支えているのが、特定出版社の痛みを伴わない、カネの不自然な回り方であり、自転車操業を許す新刊委託販売制と、問屋である取次との歪んだ力関係である。分かれると、この業界は「余りに大きくなり過ぎていて、途方もなく歪んでいる」と日々感じるようになった。

余りにも立派な産業になってしまい、分業化が進み過ぎ、いい大人が問題を直視することすら、出来なくなってしまう。

私が上京するのが十年早ければ、私も

そんな出版界の一員として、自分の得意な能力を生かして大会社の一部品になっていたかもしれない。先輩から薫陶を受け、後輩には疑うことなく出版文化を語る「村民」の一人になっていたかもしれない。

しかし本屋の店頭で、無数の「本が好きの人々」、衣食住に不自由しても一冊の高価な本を探してやまない、素朴な人たちを相手にしてきたし、私自身も単なる本好きの立場であった上でいえば、今の出版社には、無駄で無意味なものが、一杯くっついて見える。

決して組織の力を否定するものではないけれど、この業界、制作の現場だとしてよくよく見れば、驚くほど「個人」の力が本づくりを支えていることは、現場の人なら分かってくださるだろう。

なににより

「新しいこと」をやるのが大変な

業界だと気付き、ただの無力な個人ながら、閉塞感を味わう毎日だったが、幸いだったのが、この十年が、人類史に残る進化、「IT革命」の十年だったとどうとだろう。九八年のある日、私はパソコンの中に、自分の進んでいける場所を見出した。

「電子出版元年」は、出版業界の劇的な構造変化の前触れ

九八年、私が自宅のパソコンを起動したとき、そこにあったのは進化したパソコン同士のネットワーク、「インターネット」という双方向通信の世界であり、「ホームページ(ウェブページ)」や「メールマガジン」というメディアが、出版界という「中央」を経由することなく、草の根から草の根へ、直接流れていた。ほとんどの場合、主催者は個人であり、好きなことを、好き放題に発信する、一人一人が版元だった。冗談じゃない、こんな面白そうなことを放っておいてまるか。

それから三ヶ月後には、私は自分のメールマガジンを主催し、二〇〇〇人の

読者を抱える「個人版元」になっていた。私のした努力といえは、稚拙を恥じず、自分の関心のあることだけを、純粋に文章で投げかけてみたただけだ。それでも、驚くほどの手応えがあった。出版を専門とするはずの、私の昼間の職場では、同僚達がメールマガジンという概念すら理解できない状態だったが、夜、私は私の読者の声に、真剣に耳を傾ける一丁前の出版社オーナーになっていた。

結局その出会いが契機となって出版社を辞め、技術関係の会社に転職した。DTPを一通り経験し、パソコンを苦手としなかった私は、とうとう普及してきたインターネットに触発されて、技術系の会社になんか潜り込んだ。パソコンが劇的に普及し、様々な業種のいろんな役割を肩代わりしていくこの時代、敢えて出版社に勤めなくても、出版に関わることと出るとは、出版社そのものになることと違って出来る、と知ったからである。デスクトップ・パブリッシャーというものは、もはや夢でもなんでもない。

自分

でやってみてわかるが、パブリッシャーとは権力だ。これは王様だ、と思う。背伸びをしなくても、王様になれる。大きかろうが、小さかろうが、自前のメディアを持つことは、そのくらいの快感をもたらす。これは是非試していただきたい。メールマガジンの発行や自前のホームページを持つことが、一番手軽な端緒になると思う。

個人出版とは王様の喜びである。利権屋が札束を持って権益を買おうとしたITバブルは去ったが、Information

翻訳学

翻訳学の可能性

翻訳ソフトをお使いになったことがあるだろうか？ 簡単なものなら、一般的な検索サイトで試してみることができる。もちろん(一)使い物にならない。

私は米国発ウェブニュースの即日翻訳という仕事に携わっている。チームの中には翻訳ソフトを利用して翻訳者もいるが、訳文をチェックし、記事に仕上げるといふ私の業務経験から感覚的に申し上げると、翻訳ソフトからの訳文は、

それから四年。実は今年はいろんな意味で、「電子出版元年」ではないかと考えている。「電子出版」だから、本はCDで読めとか、電子ペーパーであるとか、そういうことではない。本を作り、運び、売るといふ一貫した流れの全てが、普通の人に手が届くコストで、デジタルに載る形がはつきりと見えてきたのだ。それはこの業界の劇的なスリム化、劇的な構造変化の前触れである。

ソフト

が進歩すれば解決する

かしその場合、おそらくその翻訳ソフトは人工知能のレベルに達していなければならぬ。現在のソフトもいわゆる「A

Technologyは、私のような何も持っていない者にも、素晴らしい力を与えてくれる。幸せになれるかどうかはさっぱり分からないが、楽しい時代の到来を、今一台のノートパソコンの中に感じている。

情報メールマガジン
「日刊デジタルクリエイターズ」

デジクリ

最先端のデジタルな話題から脱力系、アナログ系のコラムまで。読者はデジタルメディアに関わるすべての人たち。クリエイターを目指す人も、そうでない人も。いつのまにか、通巻1000部超、毎日配信20000部超、なんかメジャーな雰囲気も？ もちろん無料です。

～ご登録は下記アドレスまで～
<http://www.dgcr.com/>

岩坂 彰

「機能」を備えているが、われわれを満足させる翻訳ソフトは、いわば一個の「人格」をもった人工知能である。それはもはや「機械翻訳」とは言えない。同じ原文を与えても、人工知能ソフトは一本ずつ、その「性格」や「経験」に応じて多様な訳文を出してくる。なかにはフィードバックを受け入れない頑固な性格のソフトや、数字の単位を間違えるうっかり者のソフトも出てくるかもしれない。そんなわけはないか。

オムレット

—心のカガクを探検する—

心の科学研究会G.N.C./ひるます著
本体1400円 A5判・ISBN4-906493-06-8

心とは何か？心はどこにあるのか？自分はどこにいるのか？人が生きる意味とは何か？など、一般の人々がふと感じる心についての疑問を、最新の哲学・認知科学・精神医学などの研究成果をふまえ、ストーリー性のあるマンガによってわかりやすく解説。初心者から専門家まで、幅広く読んでいただける快著!! 斎藤環氏、西垣通氏ら推奨!

発行：広英社
〒170-0013 豊島区東池袋1-31-10-406
TEL:03-3986-4680 FAX:03-3986-4387
発売元：丸善出版事業部

ともかく、翻訳、あるいはその一部である自然言語処理が機械的に行なえないことはもはや明らかである。人工知能の完成を待たなければならぬという意味で、自然言語処理は「AI完全」であると言われるが、逆に、自然言語処理が可能になった段階で、人工知能はいちおうの完成と言えるのかもしれない。

こうした人工知能による自然言語処理の研究は、翻訳ソフトに応用されると同時に、われわれがいかにして翻訳という作業を行なっているかという理論的基礎付けに光を投げかけるものとなっている。具体的には、生成文法以降の統語論や、意味論の分野で模索されているさまざまな構成モデル、あるいはコンピュータ自体の並列分散処理モデルなどがある。

しかしこれらは、私が考える「翻訳学」のほんの一部にすぎない。

■翻訳教授法

前述の仕事のチームを見ても、あるいは私が教えている翻訳学校の生徒を見ても、うまくできない人をできるように育てるのはたいへん難しい（逆に、できる人は最初からできる）。

私自身が翻訳学校の生徒だったころ、先生は翻訳の理論的なことなど何も教えてはくれなかった。大学の英文講読の授業のように、延々とテキストの内容を議

論しているだけだった。自分が教える立場になったとき、私は授業を「構造化」した。カリキュラムを組み、必要なスキルを実践させた。けれども、今の私の生徒が早いとは、残念ながら言えそうにない。結局のところ、私がやっているのは翻訳技法論のレベルであって、「理論よりも実践」という昔ながらの教授法には太刀打ちできないのだ。

しかし私は、「ともかくたくさん読んでたくさん書くこと」などというアドバイスの時代に戻りたくはない。「人はいかに言葉を捉え、いかにその内容を言葉で表現するか」という翻訳の本質を理論的に考察する翻訳学というものが構築されれば、必ずや翻訳教授法の向上につながるはずである。のみならず、言語が文化の中核に存在する以上、こうした研究は異文化理解の本質に迫るものであると、私は信じている。

■認知科学としての翻訳学

私が望む翻訳学は、右のような実践的な要請を踏まえたものであり、以下のような多様な領域をカバーすることになる。

◆基礎論（言語学）

- ・ 認知言語学
- ・ コンピューター言語学
- ・ (解釈学)

◆各論（外国語学・実際問題として）

- ・ 英語と日本語学の双方に関する
- ・ 文法論
- ・ 社会言語学
- ・ 表記論と音韻論
- ・ 作文論
- ・ 翻訳技法論
- ・ 発達言語学と教授法

まず、なぜ「認知言語学」なのかというと、先ほど述べた「人はいかに言葉を捉えているか」という基本的問いが、「いかに言葉を認識しているか」という意味にほかならないからである。具体的に説明しよう。

翻訳

では、言葉が示す概念の外延のずれが常に問題になる。要するに、対応する単語が指し示す対象範囲は必ずしも一致しないということである。初学者はよく bees and wasps を「ミツバチとスズメバチ」などと訳す。bees and wasps にはほぼ対応する外延をもつ日本語の概念は「蜂」であり、訳としては「蜂」で十分である。逆に、「一匹の蜂が飛んできた」を英訳するときは、事実あるいは筆者の意図を踏まえ、a bee とするか a wasp とするかを判断しなければならぬ。技術的には、このようなカテゴリーの対応づけがいちおう有効にはたらく。



しかし筆者の意図といっても、日本人の場合 bee か wasp かなんてことは考えていないかもしれない。単に an annoying insect と言いたかったのかもしれない。原理的に、概念の外延をもって彼我を対応させようとするには無理があるのだ。

認知言語学

では、どのようなカテゴリー的な発想を廃し、「典型的な bee のプロトタイプ」というようなものを考える。そして、典型的な属性群からどのくらい離れると bee とは言えなくなるかといった研究を行なう。翻訳者には、こうした知識が必要なのである。

翻訳という営みがこのような「認識」にかかわるかぎり、それを検証可能な方法で（いわゆる「科学的」ということだが）理論化しようとするなら、認知科学の方向に向かわざるをえないと私は思う。冒頭に触れた人工知能のコンピューター

言語学は、この方向性を脇から固めるものとなる。

三番目に括弧付きで挙げた解釈学についてだが、これと翻訳学の関わりについて具体的に論じるには、私の能力も紙数も足りない。古典文献や聖書の解釈の技術として成立し、二〇世紀哲学の潮流へと発展した解釈学は、翻訳学に哲学的基礎を与えてくれるとも考えられるが、それは将来の課題とし、さしあたりは認知科学的アプローチをとりたい。

■翻訳のための日本語文法

各論としていくつかの分野を挙げたが、これらはそれぞれ、私の翻訳の実践や教育のなかで現実に気になっている諸問題に対応する領域である。

文法について言うと、現在学校で教えられている日本語文法は外国語文法の影響が強すぎ、日本語本来の姿を捉えているとは言い難い。三上章が「象は鼻が長い」を世に問うて「主語―述語」文法に疑問を呈した（主語は「象は」か「鼻が」か？）のは四〇年以上前のことだということに、いまだに学校では Subject-Object のアナロジーでお茶を濁し、その結果、「I love you」を「あなたが好きです」と訳すことに抵抗のない人が増えている。（標準的な「私は」あなたが好きです」が「象は鼻が長い」と同じ文型だというあたりは興味深い。）

外国語文法に比べて日本語文法に説得力がないため、国語の授業が英文法の刷り込みに負けてしまうという面もあるのだらう。翻訳学習者からは「原文が過去形なのに現在形に訳していいんですか」などという質問をもらう。不完全と思える学校文法ですら、日本語の動詞に現在形などという活用を教えていない。「する」は終止形であって、印欧言語の不定形に対応すると言わなければならない。ところが学習者の頭の中では、「する」が現在形、「した」が過去形ということになっている。かように日本語文法教育はお寒い状況にある。

新日本語文法の構築についてはすでにさまざまな提案がなされている。言語の適切な分析方法はひとつではないだろうが、目的を限定すれば、最適な考え方が見えてくるはずである。私が求める翻訳向けの日本語文法の構築にあたっては、かつて試みられたように、外国語と日本語を共通の構造で捉えるというのではなく、日本語は日本語で認知的に構造を分析して文法化し、外国語の文法との対応を考えるとというのが適切な方向であるように思う。

■社会言語学・音韻論・作文論

次の社会言語学というのは、読者の問題である。

私がひそかに好んで見るテレビ番組に、芸能人知名度クイズというのがある。ある芸能人の名前を世間の何パーセントの人が知っているかを当てるクイズだが、実は翻訳家にはこのような感性が求められる。ある表現がその読者層のどのくらいの人に受け入れられるか、どう受け取られるかを感覚的につかんでいなければならないのである。

翻訳はつねに読者との関係のうえに成り立つ。たとえ同じ原文でも、提供する読者対象層が違えば訳文も変わってくる。その意味で、こうした実証的研究は欠かせない。

うつと不安の認知療法練習帳

クリスティーン・パデスキーほか 著

大野裕 監訳、岩坂彰 訳 本体1800円

現代病ともいえる各種ストレス障害に認知療法で対処するための治療面接用テキスト/自習書兼用マニュアル。治療者向けガイドブック、近刊予定。

西洋思想

マイケル・マクロン 著 岩坂彰 訳 本体1600円

永劫回帰/量子飛躍/不完全性定理/集合的無意識/見えざる手/ラッティズム……西洋思想のキーワードとなる79の言葉を軽妙に解説。英語表現付。

創元社

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6
TEL:06-6231-9010 FAX:06-6233-3111

「哲学的腹ぺこ塾」への誘惑

古典から現代思想まで、哲学関連のテキストを会食(輪読)する会です。

これまでに、プラトン、アリストテレス、デカルト、ルソー、ヒューム、カント、マルクス、キルケゴール、ニーチェ、フロイト、フッサール、ベルグソン、ハイデッガー、ベンヤミン、サルトル、メルロ＝ポンティ、フーコー、バタイユ、ヴェイユ、T・クーン、デリダ、ラカン、スピヴァク、イリガライ、永井均などを読みました。

原則的には毎月第3日曜日の午後15時、るな工房/黒猫房/窓月書房において行っています(但し、8月と12月はお休みです)。

ウェブにはレジュメの一部を掲載しております。

http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/harapeko.html

「哲学的腹ぺこ塾」第33回例会

■日時: 02年09月15日(日)午後2時より5時まで。その後、暫時「二次会」へ。

■テキスト: 「孟子」(『世界の名著』中央公論社 他)

■参考文献: F・ジュリアン「道徳を基礎づける一孟子VSカント、ルソー、ニーチェ」(講談社現代新書)

■報告者: 野原 燐

■会場: るな工房/黒猫房/窓月書房 (TEL/FAX: 06-6320-6426)

■会費: 500円

「一読多読 一本を糧に」特集

[La Vue] 12号 (02/12/01発行)

いわゆる「良書」とは限らない、私にとって決定的な影響を与えた本や思い出深い本など、本についての特集を「La Vue」12号で掲載します。

そこで本紙読者の皆様に、上記のテーマで広く原稿を募集します。

「投稿規定」

■採用の可否は、編集部一任です(原稿は返却いたしません)。

■掲載紙10部贈呈(原稿料はございません)。

■原稿締切: 02/09/20、字数: 2000字前後。

■入稿形態: メール入稿あるいはFD(プレーンTXT形式、ワード形式はVer.2000まで)、FDの場合は出力紙も同送のこと。

■簡単なプロフィール(150字前後)

■原稿送付先: るな工房/窓月書房 編集部

〒533-0022 大阪市東淀川区菅原7-5-23-702

TEL/FAX: 06-6320-6426

E-mail: YIJ00302@nifty.ne.jp

★本紙は●哲学/思想●文学●詩●映画●ダンス●演劇●音楽●アート●コミック●生活●医療福祉●教育●スポーツ●インターネット●フェミニズム●セクシュアリティ●出版などをテーマに、思想・文化状況の(現在形)を各執筆者のトポス=視点から批判=論評を試みます。そして表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換=相互性を志向します。また本紙は、ウェブマガジン「カルチャー・レヴュー」とリンクしておりますので、併せてお読みください。■本紙への感想・投稿・叱咤・激励・投げ銭・木戸銭など、熱烈歓迎。■本紙および「カルチャー・レヴュー」の合評会を10月上旬に開催予定です。奮ってご参加ください。日時・場所等の詳細は、ウェブで確認されるか、「るな工房/窓月書房」までお問い合わせください。

せない。表記論・音韻論というのは、単純に言う「ジェームス・ボンドかジェイムズ・ボンドか」ということである。単に習慣の問題と思われなくても、簡単に片づけられない面がある。たとえば「政府(せいふ)」「共通語の発音は、普通は「せいふ」(あらたまった場合は「せいふ」ということになっている。これは「ジェイムズ」と書いて「じえいむず」と読むことに相当する。しかし実際は「ジェイムズ」表記の意図は、英語風に「じえいむず」と読ませたいというところにある。これと同様の方向性が、「政府」にも見られないだろうか。つまり英語の *say* のように、日常的に「せいふ」と言う人が増えていないだろうか。ひょっとすると最後の「ふ」の母音が欠落しているかもしれない。(Jamesの「ス」と「ズ」も、母音なしの「ズ」の発音ができるか否かに関係していると思われる。)日本語使用者全体で継続的に調査すれば、大きな変化が観測されるはずである。

このような発音の変化(浸食)は、外来語の侵入以上に大きな問題だと思おう。結果として、表記と発音の対応が変更されていくことだろう。「ザ」や「ファ」は市民権を得たし、アルファベットがそのまま漢字やかなの中に混じることも多くなった。現在ウェブニュースでよく見られるように、固有名詞は原綴りで表記するという方法が一般化していくことも考えられる。(私が担当しているサイトはこの流れに必死で抵抗しているが。)

■翻訳学の可能性 インターネットで検索するが、本格的な「翻訳学」の講座を置く大学は日本にはまだない。私と同じように、個人的なレベルで翻訳学を語る物書き(あるいは物好き)は何人かいるようであるが。実際問題として、機械翻訳のための言語学研究や、認知的言語学研究、新たな日本語文法の研究などは、それぞれに行なわれている。その最先端の成果は、現場の翻訳家にはなかなか届いてこない。現実問題として、翻訳のような割の悪い

仕事をしていると、お金に直結しない作業をする時間などなかなかとれない(原稿遅れてごめんなど)↓編集スタッフさま)ということもあるし、わずかな時間を使ってほつほつと認知言語学のテキストを読んでみても、翻訳の視点から直接的に興味の惹かれる部分があまり多くないということもある。

■翻訳学の可能性 インターネットで検索するが、本格的な「翻訳学」の講座を置く大学は日本にはまだない。私と同じように、個人的なレベルで翻訳学を語る物書き(あるいは物好き)は何人かいるようであるが。実際問題として、機械翻訳のための言語学研究や、認知的言語学研究、新たな日本語文法の研究などは、それぞれに行なわれている。その最先端の成果は、現場の翻訳家にはなかなか届いてこない。現実問題として、翻訳のような割の悪い

■プロフィール(いわさか・あきら)一九五八年生まれ。京都大学文学部哲学科卒。翻訳家。訳書「西洋思想」うつと不安の認知療法練習帳(ともに創元社)、「ウイトゲンシュタイン」(講談社選書メチエ)。「イエスは仏教徒だった?」(同朋舎)ほか。ワイアード・ニュース(<http://www.hotwired.co.jp/news/index.html>) 翻訳担当。E-mail: iwasaaka@goi.com

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

「つかみ」に訳す(置き換える)べきかといった翻訳技法論も関係してくる。

本紙賛助会員募集

本紙は、京阪神地区の主要書店(一部東京)・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次ウェブ(<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe.lavue.html>)に掲載しております。本紙は、市民の相互批評を目指す媒体として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭」というパトロンシップによって、非営利的に発行しております。頒価100円は、読者の方々の「投げ銭」の目安です。また、本紙を安定的に発行するために、賛助会員を募っております。年会費一口1000円(9号~12号までの定期購読料+送料+投げ銭)からの「木戸銭」を申し受けております。■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。■郵便振替:「るな工房」00920-9-114321